



## 笑いについて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸田, 省二郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00004693">https://doi.org/10.24729/00004693</a>

# 笑いに ついて

戸 田 省 二 郎

人間はいつから笑うようになったのであろうか。

旧約聖書の冒頭、「創世記」(三一四)は人間の誕生を次のように物語っている。アダムとエバは、神によつて最初に創造された人として、エデンの園で何の苦も何の不安も何の恐怖もなく生活していた。しかし、神の命令に背いて「善悪の知識の木の実」を食べてしまったために、その木の実の力で、二人は自分たちが裸であることを知り、自らの裸を恥じる〔即ち、自己反省力と羞恥心が働き始めたのである〕。二人はしかし、神の命令に背いた罰としてエデンの園を追放され、限られた寿命の下で、自力で生きて行かざるを得なくなる〔が、その代わり、生きて行くための力として二人は、共同性と、子孫(仲間)を増やすための常時的性欲に目覚めるのである〕。

そして彼らの間に先ず二人の男子が生まれるが、農夫となった長男のカインは、神に対する自分の作物の捧物よりも次男の牧夫アベルの子羊の捧物の方が神の意志に適ったことに嫉妬して、弟を憎む。「しかし、カインは弟アベルに話かけた。『野に行こうではないか。』そして、二人が野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。」神がアベルの行方を問うたのに対して、カインは知らぬと虚言をつき、この殺人と虚言の罰として、神によりさすらい人にされる。そのとき、カインは「私に出会う者はだれでも、私を殺すでしょう」と叫んで、いつ、同じ人間に殺されるかも知れない恐怖におののくのである。(「」内は筆者の註釈)

この物語はもちろん神話であるが、しかし人がまさに人間になった姿、即ち、自己反省力、羞恥心、共同性、常時的性欲、出産苦、生産心、労苦、死の恐怖、名誉心、嫉妬心、憎悪心、破壊心をもつ

に到ったことによつて緊張感や不安感、圧迫感や恐怖感、優越感や劣等感の中で悲喜こもごもに生きて行かざるを得なくなつた人間の姿が象徴的に見事に描かれている。

右の引用文には書かれていないが、もし「しかし、カインは〔笑顔で〕弟アベルに話かけた。『野に行こうではなか。』そして、二人が野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した」とあれば、我々の祖先がまさに人間となつた姿をより適確に表現することになつたであろう。笑いと人間存在との不可分性を考える、笑えるようになったとき、我々の祖先は人間になつたといえようからである。

## 二

人間は二本の足で立ち、余つた二本の足(手)を自由に使いこなしている。身体と精神は一体のものであるが、便宜上、両者を分けて考えると、まさに人間となつたこの身体の活動の内的統一的な表現が人間の精神活動である。この意味で、人間の身体活動が精神活動を規定している。しかし他方、人間の精神活動の方から見ると、身体は自己の活動の手段であると共に限界をなしており、精神はこの限界を越えず越え出ようとしている。そして精神は、その限界としての身体を動かして道具を作り、その道具を利用してその限界を越えることが出来る。この過程は円筒的なものではなく、自ら作り

出した道具に反省を加え、更に有効強力な道具を工夫し得る逆円錐的な過程である。この過程を一般的にいうと、人間が自己の精神活動(構想)を身体を動かして表現し、その表現されたものを反省し、その反省によつて更に新たな構想を表現して行く発展的過程である。この過程が人間の表現力を豊かにしてくれた。笑ひも、この豊かになつた表現力の一つの表われである。

しかしこの發展的過程の深部には、この過程と相即的に、動物が萌芽的にもつている食欲、性欲、私有欲、支配欲、自己顕示欲、羞恥心、憎悪心、恐怖心、攻撃心、破壊心、自己反省心、創造心、崇拜心、共同心、思いやりといった心の働きの、人間における深化と強化がある。

このような人間の心の働きを見ると、憎悪心や破壊心に対して思いやりや創造心といった相反する心の働きがあり、こうした相反する心の働きの葛藤や共同によつてお互いに力を増し合ひ、人間の豊かな自己表現の推進力となつてゐる。従つて、憎悪心や破壊心が悪の根だからといって、このような心の働きを断ち切つて思いやりや創造心の働きのみを拡充することは出来ないのである。

このように、人間は二本の手の自由と、深化し強力になつた心の働くと、精神活動の豊かな表現力を得たが、それによつて人間は人間以外の敵に対しては、或いはそれを滅ぼし、或いはそれに対抗し、或いはそれを使いこなして来た。しかし人間は、その敵に対し

てばかりでなく、同じ人間や同じ仲間に対してさえも、同じことを行なって来たのである。

即ち、人間は仲間を作り、仲間を思いやる存在者であると同時に、その同じ仲間からさえいつ災難を蒙るかも知れない不安と恐怖の中で生きて行かざるを得ない存在者になってしまったのである。

しかし人間はこのような不安や恐怖の根を断ち切ることには出来ないで、なるべく不安や恐怖を和らげて安寧な生活を営むために様々な表現を工夫して来た。このような表現は、文明や文化が発達し、社会が複雑化すればするほど、複雑になる。

「盗むなかれ」や「隣人を愛せよ」などの基本的な道徳規範から、法を含めて様々な社会規則に到る命令―遵守の体系、更にはそれを教えたり、それに違反した者を罰したりする組織や機関もその表現の一種であり、握手や礼もそうであり、笑いもそうである。

### 三

道徳規範や社会規則は、仲間の安寧を損わないように構成員が則すべき行為の形を示したものであるが、しかしその背後には、それを守らぬ者に対する社会的制裁が用意されており、制裁力を伴った道徳規範や社会規則の存在をそれ自体が、構成員に対して無言の圧迫感を与えている。

このような道徳規範や社会規則と人間の心との接点をなす働きが

カントの言葉を借りると、「実践理性」であり、フロイトの言葉を借りると、「超自我」である。そしてこの心の働きの中核には「良心」がある。良心の主な役割は、規範や規則――決まっ受け入れたにせよ自ら形成したにせよ――に従って自己の構想そのものの正邪を吟味し、その構想の実現の是非を判定すること、或いは既に自ら実行した行為の是非を判定することにあるが、人間の心は自己中心的に働きがちであるから、この良心の働きは心に重くのしかかって来る。この重さの故に、決々良心の声に従った場合でも、我々は何かに

しらはっとした解放感を感じるのであり、まして良心に適った快心の行為の場合には、思わず笑みさえ浮かぶ強い解放感と満足感を感じるのである。

どのようなことであれ、我々が構想を思い通りに実現し得た場合の快心の笑み――緊張感を伴えば伴うほど快い――も、この笑みと同種のものである。

この快心の笑みが自己の構想を思い通りに実現し得た場合(期待感の充足)に伴うのに対して、自己の構想が上手く実現出来なかった場合(失望)にも笑いが伴う。にが笑いがそれである。にが笑いは自己の失敗を意識した場合の圧迫感、或いは自分の失敗を他人に指摘された場合の圧迫感に伴うものであるが、しかしこの笑いには、この圧迫感を多少は弱める作用もある。

後者の場合にが笑いは自分の立場の悪さを意識して起こるので

あるが、自分の立場が更に追いつめられている場合には、へらへら笑いとなる。

へらへら笑いは、自分の弱みを意識して自分の身の安全や地位の保全のために、自分を卑屈にし相手に媚を売る笑いである。この笑いは、不安感や恐怖感から解放されたい希望の表われであるが、しかしこの笑いには解放感はなく、むしろ自己嫌悪感と共に不安感や恐怖感が強められる場合もあるのである。

快心の笑いやいが笑い、へらへら笑いが他人を意識して笑う場合でも、自分中心の反応であるのに対して、積極的に相手に働きかける笑いがある。

微笑や嘲笑がそうである。我々は微笑むことによって、我々自身の緊張感や圧迫感を和らげることが出来るし、微笑みかけられる相手も何かしら温かい解放的なほっとした気分になる。笑いにも伝染性があるからである。

微笑みかけは、握手や礼などの挨拶儀礼に伴うことが多いが、この儀礼も自分が相手に敵愾心をもたないことを示し、相手の不安や恐怖を取り除こうとする希望の表現という点で微笑みと同じであり、両者は同じ心の働きに根ざしているといえる。しかし儀礼形式が異なる人々の間でも微笑みだけは通じ合える場合が多いが、それは、微笑みの方が儀礼よりも一層心に密着した表現であることを示しているといえよう。

微笑みには、このように相手を不安感や恐怖感から解放する社会的な解放作用があるが、それに対して嘲笑いには、逆に相手に不安や恐怖を与える反社会的な作用がある。

嘲笑いは相手を攻撃する言葉や動作に伴って、その言葉や動作を強める働きをもっており、場合によっては言葉や動作以上の破壊力を発揮する。この笑いは、相手に対する軽蔑心や憎悪心や優越感（劣等感を潜ませている場合もある）の満足といった、いわば心の暗部に根ざしているため、期待通り相手にダメージを与えて得ても、この笑いには、笑う側にもほろ苦さや空しさが残るのである。

ベルクソンは、「笑い〔の効用〕は先ずもって矯正である。辱しめることによって笑いは、笑いの的となる人に苦しみを与えなければならぬ。……笑いが共感と好意の顔をしていたら、その目的を遂げないであろう」と述べて、笑い——主として嘲笑、後に述べるおかしさの笑いの場合もあるが——の矯正作用を強調している。

人間では、思いやりや崇拜心や創造心といったいわば心の明部の働きが豊かになると同時に、憎悪心や軽蔑心や破壊心といったいわば暗部の働きも豊かになっている。この後者が強く現われた場合、仲間にとっては悪となる。従って、後者が強く現われないよう、人間は笑いによって辱しめ、宗教で歯止めをかけ、道徳で抑えこみ、法で脅しをかけ、それでも現われる場合には、法の執行で切り取ってしまう。笑いにこのような矯正作用があることは否定出来

ないが、ベルクソンのように、矯正力を笑いの作用の中心と見る見解には同意出来ない。

右のどの笑いも、我々が何か或る構想を実際に実現しようとした場合に伴う笑いであつたのに対して、我々は、(多くの規範や規則に縛られていることの反動として) してはならないことや、実現可能なことを単に想像上で実現して笑うことも出来る。これが可能なのは、想像力が発達したことによるのであるが、想像上の笑いは過去の出来事を思い出した場合にも見られるのである。

#### 四

これまで見て来た笑いは、いずれも、現実に表現を目指すしろ、単に想像上で表現を目指すにしろ、何らかの実現期待感に關つていた。ところが予期しない意外な出来事に出合った場合にも笑いが伴うことがある。おかしさとしての笑いがそれである。

では、どのような場合に人間はおかしさを感じるのであろうか。

我々の外界認識を反省して見ると、外界は我々の先天的な認識能力によって把握されて初めて、或る形をもつたものとして認識される。

住み馴れた環境で日常出会う対象は、我々にとって見馴れた姿で有るべくしてそこに存在している。だから我々は、安心してそこに生活してゐるのである。

ところが、そこにそう有るべきはずの形が予期に反して急に崩れた場合、我々はその崩れによって驚かされるが——人間は記憶力や予期力が殊に発達しているから——、その驚きが場合によっては我々におかしさと呼び起こし、そのおかしさが笑いとして表われるのである。「笑いとは張りつめた期待が突然無に一変したことから起る興奮である」<sup>(2)</sup> というカントの定義は、この笑いを指している。

しかし、有るべき形の崩れがおかしさと呼び起こすといつても、有るべき形の崩れがいつもおかしさを感じさせるわけではない。おかしさを感じるのは、その形の崩れを感じる主体の側であるから、その主体の側の条件を考えて見なければならぬ。

おかしさを感じる主体の側の条件としては、主体の側に強烈な緊張感や不安感や恐怖感がなく心に余裕があること、形の崩れが起っている状況が主体に不安感や恐怖感と呼び起こさないこと、その形の崩れを崩れとして感じさせる、元の有るべき形について主体が知識をもっていること、が不可欠である。

では次に、有るべき形がどのような崩れ方をすると、おかしさと呼び起こすのであろうか。

人間の自然な動作についていえば、ベルクソンは前掲書の中で、当然スムーズに動くはずの動作が(1)固さ・きこちなさ (raideur)、(2)機械的な動き (mécanique)、(3)放心 (distraction)、(4)不恰好 (difforme)、(5)誇張 (exagération)、(6)なごみ (dégénération)

(7) あべこべ (inversion) によって不自然さを感じさせる場合に、我々はおかしさを感じると指摘している。その他にも、物まねやし損じを加えることが出来るよう。

次に、或る状況のおかしさについて、同じくベルクソンは、(1) あべこべ、(2) 取り違え (quiproquo)、(3) 誇張、(4) おとしめを挙げているが、更に(5)不可能事を加えるべきであろう。

(1)の例としては子供がいはって父親がはいつくばっている状況(役割や地位の転倒)や王様がボロ服を着てボロ家に住み乞食が立派な服を着て立派な家に住んでいる状況(役割や地位に伴うべきものの転倒)、(2)の例としては展示されている芸術家のオブジェ作品が掃除人に片附けられてしまう状況、(3)の例としてはスリ犯が牢屋の中でスリの練習をしている状況、(4)の例としては王様が便所掃除をしている状況、(5)の例としては豚が蒲団を敷いて寝ている状況を挙げることが出来るよう。

おかしさは、動作や状況ばかりでなく、言葉の使用に伴う場合もある。ベルクソンは繰返し(repetition)を挙げているが、他にも、同音異義(例・医師が飛んで来たイシに当たった)、類音異義(この商品を買うと牛の置物がもらえます。ウシシ)、無意味な語の挿入(話の途中で急にパピペポといったりする)、物まね、取り換え(社長はんがお越しやして御飯食べやがった)などがおかしさを誘う働きをもっている。

このような言葉の使用は滑稽(馬鹿馬鹿しいお笑い)を誘う場合であるが、ウィットやユーモアや諷刺の表現として言葉を用いることも出来る。

滑稽が、駄洒落を含めて大して知性的な雰囲気を感じさせないのに対して、ウィットには洒落を含め、知性的で軽妙な短い言語表現を借りておかしさと呼び起こそうとする遊び的色彩が強い。

諷刺も遊び的色彩を帯びてはいるが、その対象——社会の構造そのものに根ざした、個人の力ではどうしようもない不合理なものや、社会の権力者の場合が多い——を笑いとばして溜飲を下げ、一種の憂さを晴らす狙いをもっている。その狙いを実現する手段は言語に限らず、絵画や彫刻でもよいわけである。

これに対してユーモアは、言葉によるおかしさを利用して、その場の緊張感や圧迫感を和らげようとするものである。

次にそれぞれの例を挙げて見よう

「まるくくと からだの名所 知れぬ肥」。これは「まるくくと肥っているので、女性の秘所が見えないほどだ」という意味の江戸時代の古川柳であるが、言葉の想像性を巧みに利用して滑稽さを表現している。

一休さんが、「屏風の中の虎を捕まえて見よ」といわれたのに対して、「虎を追い出して下さい」と答えたといわれるその答えは、ウィットの例である。

これも古川柳の「覚えなく 屁の出るころに ひのころも」(文字通りの意味は、少々糞碌してオナラが出ても気づかぬ頃にやっと高位の坊さんになれて緋の衣が着れるのだ)は、自分がいえば滑稽、他人がいえば諷刺となる。性や屁はタプー視されているからこそ、それを巧みに利用すると、おかしさが増すのである。

老宰相が議会に計らず独断で事を決めたのに対して、野党から「あなたは糞碌したのか」と詰問されたとき、「糞碌しておりますので議会の声が聞えませんでした」と答えた場合、これはユーモアである。

このような色々な笑いについて更に検討を加える前に、笑いを規定している風土性や歴史性について考えておこう。例えば、日本人にウィットやユーモアが欠けているといわれるのも、日本独特の風土や歴史によると思われるからである。

## 五

有るべき形の突然の崩れが笑いを誘う場合、笑う人はその笑いの対象の有るべき形について既に知識をもっていないなければならない。一般的に言って、我々の知識は個性をもった人間としての先天的な能力と個性的な体験によって構成されたものとしても、我々が住んでいる自然界や文化界の様々な形を我々が知覚しイメージ化しなければ、我々の知識は成立しない。

この自然界は風土であり、文化界は歴史の世界であるから、我々の笑いが自然界や文化界の様々な形に密接に関係している以上、我々の笑いも風土や歴史の影響を受けざるを得ない。

まず、笑いの風土性について考えて見よう。

日本は温帯に位置する島国で雨が多く、山も多い。その山間に、人々は肩を寄せ合い、耕作農業や林業、漁業を中心とした共同体的な生活を営んで来た。しかもここ千数百年、外国から大量に人間が移住して来て、外国の言語や慣習を持ちこんだということも起きていない。このような事情から日本は、島国・村型の独特の年功序列的な「タテ社会」を築き、大体均一的な文化を形成して来た。従って、お互い同士の意志の疎通に多弁を必要とせず、またお互い同士の紛争を解決するための成文法も発達しなかった。しかしその代用作用の一つとして、微笑みが重要な役割を果たすようになった。村型社会の雰囲気と和らげ、年功序列型社会の心理的圧迫感を和らげるためである。

欧米のように、様々な民族が共存して生活しているところでは、お互い同士の意志の疎通のために多弁が必要となり、お互い同士の紛争を解決するために法律が発達し、またお互い同士の雰囲気と和らげるために、言葉を用いたウィットやユーモアが発達したのである。欧米人から見ると、日本人の多用する微笑みが、意味のない気味の悪い笑いと感じられるのも、右のような風土や歴史の違いに



基づくものであろう。

今見て来たのは、他国と較べた場合の日本の風土的、歴史的特殊性であるが、しかし同じ日本の中を見ると、気候の違いもあり、土地土地で成り立ちも違い、しかも山でお互い同士隔てられていることも多いから、そこには方言の違いや多少の文化の違いも見られる。

例えば大阪は、その解放的な雰囲気——古代から外国を含めて方々の土地から人が訪れて来たために生まれた——を背景に、他の方言に慣れた人々が聞くと言に響く方言を用いて独自の笑いの世界を築き上げた。大阪に限らず、世界的に見ても、人々が集まって来る解放的な土地柄では、笑いの世界が発達し、しかも共通に美味しい料理を工夫して来た。

笑いの世界の発達と料理の発達の共存現象を見ても、両者が共に、人間の緊張感や不安感や圧迫感の解放に深く関っていることを物語っている。笑いの快楽も料理の快楽も、精神的に鬱積したエネルギー解放に伴っており、この解放によって人間は生気を蘇らせているのである。

次に、笑いの歴史性について考えて見よう。

日本はここに数十年の間に、農業社会から急速に工業社会に変って来た。

そのために一面では商工業地帯に人口が集中することとなった

が、しかし人口が集中したからといって、農村共同体のようにお互い同士知り合っているわけではなく、隣人も含めてほとんどすべての人がお互い同士一面識ももたない人々の集まりである。このような人間関係の中では、人口密度が幾ら増しても、人と人との間の心の隔たりは拡がって行く。

他面では、乗物や映像のスピード感に影響されて、心の中の動きまで速まっているのであろうか、人々の話し方も話しの間合いも速くなって来ている。このような速くなった話し方で、人と人との心の隔たりを埋め合わせ、孤立の不安感を解放することが出来るかのように、スピード感はあるが、大して意味のないおしゃべりが氾濫している。

社会変動による世代の落差、心の隔たりの拡大とスピード感の増大という新しい事態を反映して、例えば漫才でもスピード感をもった毒のある漫才が受けているのである。

落語にしても、着物を着て江戸時代の古典落語のネタを語って笑わせるスタイルの他に、テレビの時代を反映して、映像を利用した現代スタイルの創作落語も現われて来ている。これも、工業社会の到来と、現在の自由な解放的雰囲気が生み出したものである。

また、交通・通信手段の発達を背景とした日本の経済発展は、日本を島国から国際社会に変貌させているが、この変貌によって日本人は否応なく外国人と付き合わざるを得なくなり、それが、先に述

べた人口集中による見知らぬ人々の海の中での生活と相俟って、日本人に多弁とウィットやユーモアの訓練を要求している。

風土性を踏まえながらも、人間は自分の属している時代から逃れられないのであるから、社会の有り方が変わると、それは笑いにも影響を与えて来るのである。

このような社会変動の影響を受けて、新しい漫才や落語が工夫され、ウィットやユーモアを身につける努力も行なわれているが、しかしそれが出来るのは、笑いのような心の最深部の働きに伴うものでさえ意識化し、それを文化の一つの形として位置づけ、心の解放に役立てる力が人間——わざわざ笑いを求めて笑いが工夫され売られているところに出かけて行く存在者——にはあるからである

## 六

次にフロイトのウィット論とユーモア論に沿って、笑いと人間存在との関わりを考えて見よう。

フロイトは、滑稽とウィットとユーモアの関係を念頭において、以下のように論じている。

滑稽もウィットもユーモアも、何かしら我々の心を解放してくれるもの (*etwas Befreiendes*) をもっている点と、知性の働きによって快感 (*Lust*) を感ずる点では同じであるが、<sup>(3)</sup> 先ず、滑稽とウィットについて見ると両者は次の点で異なる。

即ち、滑稽が自分におかしさを感じさせてくれる対象があればよいのに対して、ウィットの場合は、それを理解しそのおかしさを感じてくれる相手が必要<sup>(4)</sup>、滑稽は特に言葉に限定されないのに対して、ウィットは言葉によること、滑稽が対象次第で新しいおかしさ呼び起こしてくれるのに対して、ウィットは新しいことを教えにくれず、過去の経験に含まれていること<sup>(5)</sup>のみに関っていること、これらの点で両者は異なっているのである。

殊にウィットのこの最後の特性は、ウィットと無意識との深い関りを示している。

ウィットの特徴の一つはその短かさにあるが、それは無意識の中で起こる次のような心理的濃縮 (*Verdichtung*) に対応している。この濃縮とは、ウィットが発達する初期の遊びの段階で形成され始め——この濃縮 (夢に典型的に見られる) が行なわれる際に、その対象となる要素の幾つかは失われて行くが、残りの要素はその失われた要素のエネルギーを受け取って一層強化される——、ウィットの発達が更に高度な段階になると、思考が無意識 (幼少期に形作られ意識下に沈んだ思考) の中にもぐりこんで完成させたものである。この濃縮がウィットの快感の源泉である。何故かという、ウィットが形成される際に、思考が無意識の中にもぐりこみ、そこに子供の頃の、言葉を伴った遊びの住み家を再発見して、再びその頃の快感を手に入れるからである。これをウィットが表われる場で見

れば——ウィットは何か或る障害に直面してそれを克服するために語られるのであるが——このような無意識がいわば快感を背負って突然ウィットとして表に現われると、我々におかしさを感じさせるのである。<sup>(6)</sup>

次に、ユーモアについて見ると、それは何かしら堂々とした見下すようなところをもっている点で、滑稽やウィットと異なっている。

フロイトは、ユーモアの例として、「月曜日に絞首台に引かれて行く犯罪者が『ごりゃあ、今週は幸先がいいぞ』といった」場合を挙げ、ユーモアによって、「自我は現実の側からの誘因で傷つけられること、苦悩を押しつけられることを拒み、外界からの傷を近づけぬようにするばかりでなく、その傷も自分にとっては快樂のよすがとしかならないことを暗示する。」「いま述べたこれら二つの特色、即ち現実の側からの要求の拒否と快樂原理の貫徹とによってユーモアは、精神病理の分野で我々が頻繁に出くわす、後退のないしは反動的過程に近似したものとなっている。ユーモアが自分を苦しめそうな現実をわが身に近づけないようにする機能をもつということは、それが、強制的な苦しみを逃れるために人間精神が編み出したあの諸方法の大系列、神経症に始まり、精神錯乱に極まり、陶醉、自己沈潜、恍惚境を含んでいるあの大系列に属するものであることを意味している。それ故にこそユーモアには、例えばウィット

などには全く見られない一種の威厳が備わっているのである」と述べている。<sup>(7)</sup>

先の例でもそうであるが、一般にユーモアでは、自我が一方では自分を大人としての優越した立場に置き、他方では同じ自分(或いは他人)を子供のように取り扱うことが出来るのは、次のような私の構造に基づいている。「この自我は単一なものではなく、その中核として、我々が超自我と名づけている特殊な裁判所を内蔵している。そして場合によると自我はこの超自我と合流して、我々の目には両者が分ちがたく映ることもあるほどだが、また場合によっては、両者がはっきりと分離することもある。超自我は、その発生史からいえば、両親が子供に対してもっている裁判所としての意味を受け継いだものであり、自我の独立性を全く認めないことも往々にしてあり、事実、依然として自我をかって幼少時代に両親ないしは父親が子供を取り扱っていたように取り扱う」構造がそれである。<sup>(8)</sup>

超自我が現実的自我を子供のように取り扱い得る力は、ユーモリストその人がエネルギーを自我から取り上げて超自我に移すことによつて超自我に与えられるのであるが、新たなエネルギーを受け取った超自我は、自我など取るに足らないものと見なし、外界の現実に対する自我の反応可能性を抑圧してしまふことが出来るのである。

フロイトによると、自我から超自我へのこのエネルギーの転移

は、同時に感情エネルギーの消費の節約でもある。その理由は、先の例のようにユーモアが自分自身に向けられる場合には、自分の苦悩を忍ぶ感情の消費をユーモアによって節約しているからであり、またそのユーモアを聞く他人の側に立つと、相手が苦悩と絶望に打ち沈むであろうと期待して感情を高ぶらせているのに、ユーモアで肩すかしを食わされ、感情の消費が節約されるからである。<sup>(9)</sup>

精神的エネルギーの消費の節約という観点から見ると、ユーモアが「感情消費の節約」であるのに対して、滑稽は起こるべき期待表象との落差——我々の表現では有るべき形の崩れ——がもたらす「表象消費の節約」<sup>(10)</sup>であり、ウィットは何か或る障害に直面した場合の圧迫感を止揚して精神的消費を軽減する「圧迫消費の節約」<sup>(11)</sup>である。このそれぞれの節約がそれぞれに快感をもたらすのである。

## 七

以上がフロイトの笑いの理論の極めて大雑把な概要であるが、彼の理論には、笑いと無意識の関係、笑いと快楽との関係、など学ぶべき点も多いが、次のような疑問点も含まれている。

(1)ウィットの快楽の源泉を殊に幼少期までもどして考える必然性はないのではなからうか。なるほど幼少期の体験は人生に大きな影響を与えるが、しかし我々の体験は層をなしているのが事実ではなからうか。幼少期には幼少期にのみ敏感に感じ得るおかしさがあ

り、成人しないと解からなのおかしさもある。要は、人間はおかしさを感じ、それを笑いで表現し得る能力を先天的にもった存在者だということであろう。

(2)文化を理解出来るようになる少年期から青年期にかけて人間の精神構造の基本的な形が形成されることを考えると、笑いと無意識との関連はやはり重要である。我々が老壮期になっても自分の青少年期に親しんだ歌や笑い(漫才など)の影響から容易に抜け出し得ないのは、そのことを物語っているといえよう。しかし、ウィットのみを特に無意識と関係づけて考える必然性もないであろう。無意識にまで下りて考えると、どのおかしさも大なり小なり無意識と関連をもっているのではなからうか。先の滑稽と諷刺の例に出ている性や尻は、それがタブー視され、いわば無意識下に押しこめられているからこそ、押しこめられている圧迫感の助けを借りて、おかしさを際立たせることが出来るのではなからうか。

(3)彼はウィットと圧迫感との関係を重視しているが、しかし彼が論じている範囲でいえば、むしろユーモアと圧迫感の方が関りが深いであろう。強い圧迫感の中にあるからこそ、その圧迫感に立ち向かい、その圧迫感からの解放としてユーモアが要求されるからである。

(4)彼は「超自我はユーモアによって自我を慰め苦悩から守ろうとする」<sup>(12)</sup>ともいっているが、しかし彼は超自我の核心を良心の働き

——なすべきことを命じ、してはならないことを禁じ、或いは行なつたことを審問する——に見ているのであるから、ユーモアはむしろ超自我の圧迫からの、自我の自己解放作用の一種と考えられるべきではなからうか。

(5) 既に見て来たように、笑いは、期待感の充足、或いは失望・挫折、或いは予期されていた有べき形の突然の崩れに伴い、緊張感や不安感などからの解放(或いはその期待)作用をもっていると考えられるが、この考えが正しいとすると、笑いの快楽は、精神的エネルギーの消費の節約というよりはむしろ、圧縮されて膨張した精神的エネルギーの瞬間的発散の結果と見られるべきであらう。日常生活で実感しているように、節約よりはむしろ発散の方が快感をもたらしてくれるからである。

それは、いわゆるベーンズのある笑いが人を引きつけるのを見ても明らかであらう。ベーンズのある笑いが人を引きつけるのは、何事かに必死に取り組んでいたのに失敗してしまつた挫折や、心の中に深く入りこんでいるものを持ち続けようとしたのに失つてしまつた失望への共感が我々にもたらした圧迫感——圧縮されて膨張したエネルギー——に対して、その挫折や失望の原因となつた形の崩れのおかしさ——精神的エネルギーの発散——が対応し、相乗効果を出し合つて哀感を感じさせるからであらう。

## 註

- (1) Henri Bergson : *Le rire* (presses universitaires de France, 1978), p. 150.
- (2) Immanuel Kant : *Kritik der Urteilskraft* (Original-Ausgabe), S. 225.
- (3) Sigmund Freud : *Der Humor* (S. Freud Gesamte Werke XIV, 5. Auflage, S. Fisher Verlag), S. 385.
- (4) Vgl. Freud, S. : *Der Witz und seine Beziehung zum Unbewußten* (Gesammelte Werke VI), S. 160f.
- (5) Vgl. op. cit. : S. 103.
- (6) Vgl. op. cit. : S. 192ff.
- (7) Vgl. Freud, S. : *Der Humor* (Gesammelte Werke XIV), S. 385f. (『フロイト選集』第九巻、日本教文社、所収の高橋義孝訳。但し訳文を変えたところもある。)
- (8) op. cit. : S. 386f.
- (9) Vgl. op. cit. : S. 261f.
- (10) Vgl. op. cit. : S. 222ff.
- (11) Vgl. op. cit. : S. 132f.
- (12) op. cit. : S. 389.